宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第21回
 第5章 古田足日先生
 その3 社会にひらく「散文」(上の前半)

昨年(2024年)は、古田足日・田畑精一の絵本『おいしいのぼうけん』(童心社1974年)の刊行50周年だった。私が古田足日先生(1927~2014年)に出会ったのは、『おいしいのぼうけん』が刊行された、つぎの年。私は19歳だった。

宮川ひろ／灰谷健次郎／古田足日

川端有子さんの『児童文学の教科書』(玉川大学出版部2013年)の改訂新版(2025年)が刊行されたので、あらためて読んでみた。初版のあとに出版された新しい作品に関する情報をくわえたり、一部構成を組み替えたり、いろいろ改訂されているようだ。

第二部ジャンル編・第6章「リアリズム——日常・家族・学校・友情・人生」の書き出しは、初版の記述とかわらない。

主人公である子どもの日常生活をありのままに写實的に描いたのが、児童文学でいうところの「リアリズム」(「ファンタジー」というジャンルの対概念)である。一般に子どもの実際の体験は、おとなに比べるとその行動範囲が狭く、家庭と学校が主な舞台となる(これが解放された休暇の物語になると、一種の冒険ものになりうる)。それゆえ、子どもたちのリアルな日常を描いた作品は、児童文学の初期のころ——つまり一九世紀のイギリスでは——男の子は「学校物語」、女の子は「家庭物語」というふうには、性別でその舞台が分かれていた。それが当時の文化的背景を反映したものであることから、リアリズムの作品は、書かれ、読まれた、時代・社会・文化・慣習に強く依存しているといえることができる。

(カッコ内原文)

ページをめくると、学校を描いた日本の児童文学について書かれているところが出て来る。ここも、初版とかわりがない。

寄宿制度の学校がほとんどなかった日本では、英米のような学校小説は生まれなかったが、学校が子どもたちの生活の場であることに変わりはない。小豆島に赴任してきた新任の女先生と生徒たちの交流を描いた壺井栄(一八九九—一九六七)の『二十四の瞳』(一九五二)がその端緒だろう。その後、宮川ひろ(一九二二—二〇一八)は、教員生活体験をもとに『先生のつうしんぼ』(一九七六)など学校を舞台とした物語を多く書いている。やはり教員であった灰谷健次郎(一九三四—二〇〇六)は、子どもというよりは新任の先生の成長を描く『兎の眼』(一九七四)で注目された。古田足日も『宿題ひきうけ株式会社』(一九六六、新版一九九六)など学校を中心とした舞台を多く描いており、日本の子どもたちの日常にとって、学校という場がいかに重要であるかがうかがわれる。(カッコ内原文)

古田足日の『宿題ひきうけ株式会社』(理論社)のタイトルがあがっている。そ

の「まえがき」は、こんな文章だ。――「もし、きみがニンジンがきらいだとしても、ニンジンを食べなければならぬ。でも、もし宿題がきらいだとしたら、考えなければならぬ。なぜこの世の中に宿題があるのかということ。そして、ニンジンと宿題はどうちがうかということ。」（引用は『新版 宿題ひきうけ株式会社』理論社 1996 年による。以下も同じ）（注 1）

「まえがき」は、「ニンジンを食べなければならぬ。」と明快に断言しているけれども、私は、読むたびに、ほんとうにニンジンは食べなければならないのかなと疑問に思う。それは、やはり、川端有子さんがタイトルをあげている、宮川ひろの『先生のつうしんぼ』（偕成社）を思い出すからだ。

『先生のつうしんぼ』には、この連載の第 12 回でもふれた。学級会で「給食のおかずは、のこさず食べましょう」と決めたのに、担任の古谷先生は、ひそかにカレーのニンジンを残している。――「先生は、スプーンにのせたにんじんを、いま口に入れるところでした。入れたとおもったら、ポケットからちり紙をだして、左手で口をふきました。」このようすを目撃したのが松木吾郎だ。それでも、吾郎は、このことは秘密にしておこうと考える。――「でも、ただだまっているだけでは、おもしろくありません。そうだ、先生のつうしんぼをつけてやろう……」これが物語のはじまりである。

もちろん、『先生のつうしんぼ』が、給食のニンジンを食べなくてもいいと主張しているわけではない。食べなければならないものだからこそ、古谷先生は苦心している。ただ、『先生のつうしんぼ』の前提になっているのは、食べなければならないものでも、食べられないことがあるという考えかただろう。だから、吾郎は、ニンジンが食べられない先生をかわいそうに思い、先生に寄りそおうとする。

ニンジンと宿題

『宿題ひきうけ株式会社』の「まえがき」には「ニンジンと宿題はどうちがうか」という問いかけがあって、二つは、対比されている。ニンジンは、人間にとって基本的な衣食住の生活や文化にかかわるもの、宿題は、社会のなかでつくられた一種の制度という位置づけだろうか。

川端有子さんが名前をあげた現代の 3 人の作家、宮川ひろ、灰谷健次郎、古田足日の作品のうち、灰谷の『兎の眼』（理論社）は、川端さんも書いているように、小谷芙美先生の教師としての成長物語である。学校のなかの子どもを中心に描いた『先生のつうしんぼ』や『宿題ひきうけ株式会社』とは、またちがうものだ。宮川ひろと古田足日については、比較して考えていくことができそうだ。

ニンジンだけでなく、宿題についても、宮川ひろを持ち出すことにする。雑誌『日本児童文学』の 1970（昭和 45）年 11 月号の特集 1「幼年童話集」に宮川ひろが寄稿した「しゅくだいグループ」だ。二段組みで、全部で 3 ページの短編は、いきなり、こうはじまる。

「ねえ、しゅくだいグループ、つくらない？」

ゆうこは、となりのせきの、けんいちにしてみました。

「それ、なにをすること。」

けんいちは、きよとんとしたかおをしています。

「じゅんばんにねえ、せんせいになるのよ。」

ゆうこのこえは、はずんでいます。

「せんせいになるのなら、わたしもいれて。」

まえのせきから、よしこがくるりとうしろをむいて、いいました。

1年生の2学期になっても、ゆうこたちの先生は宿題を出さない。ゆうこは、宿題というものをやってみたかったのだ。最初の先生はけんいちで、国語の教科書の「しろい小さなにわとり」を1回書き写してくること。まねっこの先生だから、自分でも宿題をすることになる。宿題をしてきた人には○をつける成績表もつくった。

ひと月くらい、ちっともあきないで、宿題の出し合いがつづく。ある日、メンバーのひとりの、へぼくん(1年生になったころ、「くぼおさむ」という名前の「く」を「へ」と書いていたから、いまでも、そう呼ばれている)が、こんな宿題を出す。――「きょうはね、りんごをひとつ、まるごとかじってたべること。」ゆうこは、「そんな、ふざけたしゅくだい、だめよ。」と怒ったけれど、やっぱり、家でりんごを食べながら、「へぼくん、あきてきたんだわ」と考える。

「しゅくだいグループ」は、宮川ひろの単行本にも、何かのアンソロジーにも収録されなかったから、すっかりわすれられた作品になった。しかし、私には、ずいぶんつかしい。「しゅくだいグループ」は、私の体験そのものだからだ。

私の小学1年生のときの担任は、年配の女性のH先生だった。余裕をもって小学校生活をスタートさせたいと考えてくださったのだろう。決して宿題を出さない、とてもよい先生だった。でも、私は、宿題をやってみたくて、「ねえ、しゅくだいグループ、つくらない？」と友だちをさそったのだ。メンバーは4人、「しゅくだいグループ」が軌道にのったころ、「りんごをひとつ、まるごとかじってたべること。」という宿題を出したのは、Tくんだった。

「しゅくだいグループ」が発表されたとき、私自身はもう中学3年生になっていたが、これは、小学1年生だった私にかわって母宮川ひろが書いた生活綴方のようなものだ。(注2)「しゅくだいグループ」をめぐる事柄が実際に起こったとおりに順々に描かれている。宮川ひろは、子どもたちの現実の内側に入り込み、子どもたちの現実を容認して書いていく。しかし、古田足日は、子どもたちをめぐる現実を批判的に描く。

「試験・宿題なくそう組合」まで

宮川ひろは、宿題の出ない1年生のクラスに生まれた「しゅくだいグループ」を描いたが、古田足日の『宿題ひきうけ株式会社』の5年生の子どもたちの現実には、宿題が厳然と存在する。

宿題ひきうけ株式会社が設立されるきっかけは、サブローがもたらしたニュースだった。――「テルちゃんがとうとう、プロ野球のスネークスにはいったよ。けいやく金一千万円だって」社会科の宿題をいっしょにやるために集まっていたみんなは、ショックをうける。

ミツエはいすの上にぺたんとすわりこんだ。

「やになっちゃうなあ。わたしのねえさん、ことし大学出て就職したでしょ。月給たったの二万五千元よ」

「そう、テルちゃん、小学校のときから野球ばかりしてすこしも勉強しなかったのにね」と、アキコもためいきをついた。

アキコは、「わたし、なんだか宿題やる気しないわ。(中略)勉強するのが、まるでばかみたいだわ」ともいう。

「一千万円ほどじゃないけど、五百円くらいなら確実にもうかる方法があるよ」と言い出したのはタケシだ。――「ミツちゃんとアキちゃんがきょうの宿題をやる。ふたりがやっているあいだに、ぼくたちがぐるっと友だちのうちをまわってくるんだ。『十円出せば、きょうの宿題かわりにやってやるよ』ってね。すぐに百円ぐらいはもうかるよ」この思いつきは、なかなかの成功をまねき(1日めの収入は233円)、会社が発足することになる。

勉強しなかったテルちゃんのプロ野球入りのニュースは、なぜ勉強しなければならないのか、なぜ宿題をやらなければならないのかという問いを引き出す。テルちゃんの契約金と、ミツエの大学卒の姉の初任給のちがいは、労働とその対価という問題につながってくる。

第1章「宿題ひきうけ株式会社」のおしまいで、お金をとって宿題を請け負っていることが問題になって、宿題ひきうけ株式会社は、解散に追い込まれる。しかし、その後も、子どもたちの現実がつぎつぎに相対化されていくような事柄や、それをめぐる子どもたちの議論がつづく。

第2章「むかしといまと未来」では、人間は「やぼん」から進歩してきたのかということが問われる。「やぼんといえば、あの戦争だなあ。」といったのは、太平洋戦争のとき、兵隊として中国に行ったスズキくんのおとうさんだ。そして、子どもたちは、自分たちの未来をどのように描けるのか。

終章にあたる第3章「進め ぼくらの海賊旗」では、元宿題ひきうけ株式会社の社員たちが学校の新聞部に入部する。新聞部は、クラスのボスを追放するキャンペーンを展開する。ところが、クラスの子どもたちをいじめるボスのコウヘイが思いがけないことを言い出す。――「勉強できないより、出来る方がおもしろいだろ。いじめられるより、いじめる方がおもしろいんだ」「じゃ、優等賞をもらった連中にもあやませろ。あの連中も人をいじめたんだ」コウヘイは、成績の優劣がクラスのなかに格差を生んでいるといたいようだ。コウヘイの発言がきっかけになって、新聞部は、通信簿のことを調べはじめる(通信簿というモチーフに関して、松木吾郎が古谷昭一先生の通信簿をつける『先生をつうしんぼ』と対比的に語ることができそう)。彼らの通信簿は、「5になる人が何人かにきまっている」相対評価だった。あらためて、ほんとうの勉強とは何かが問われていく。子どもたちの議論は、「試験・宿題なくそう組合」をつくることに発展して、「組合」は、教育委員会にも行って、話をしたのだ。

「散文性のかく得」(『小さい仲間』1954年7月)、「さよなら未明」(『現代児童文学論』くろしお出版1959年所収)といった評論をへて、古田足日が実作者として獲得していった「散文」は、『宿題ひきうけ株式会社』などでは、作中の、そして、読者である子どもたちの目を社会にむけて開く役割をはたしていく。(つづく)

(注)

1、1966(昭和41)年に刊行された『宿題ひきうけ株式会社』には、宇野浩二の童

話「春を告げる鳥」(『幼年倶楽部』1926年8月)を引用して、子どもたちが「やばん」について考える箇所があった。1995年、古田足日は、引用した「春を告げる鳥」がアイヌ民族差別にあたる作品であるという指摘をうけ、「春を告げる鳥」の引用をふくむ『宿題ひきうけ株式会社』という作品のありがたを考え直すことになる。「春を告げる鳥」の引用と、それに関連する部分を削除して、書き直したのが『新版 宿題ひきうけ株式会社』である。くわしくは、「新版あとがき——なぜ新版を出すのか」を参照のこと。なお、『全集 古田足日子どもの本』全13巻・別巻1(童心社1993年)の第7巻『宿題ひきうけ株式会社 忍術らくだい生』の改訂版も、1999(平成11)年に刊行された。

- 2、私は、1年生の秋から小学校がおわるころまで、毎日のように作文や詩を書き、たくさんの冊数の作文帳が残っている。これは、この連載の第3回にも書いた。私の作文「十点でかんぱい」が母のデビュー作『るすばん先生』(ポプラ社1969年)の「れいてんでかんぱい」の素材になったことも記した。だが、「しゅくだいグループ」のことは、作文には書いていないはずだ。小学1年生のころには、ある程度長い期間にわたる事柄を作文に書くことが、まだできなかったのだろう。だから、やはり、「しゅくだいグループ」は、1年生だった私にかわって母宮川ひろが書いたものなのである。私の作文については、宮川ひろ「綴ることにたすけられた子育て」(『作文と教育』1992年2月、『母からゆずられた前かけ』文溪堂1993年所収)参照。